三橋正先生を偲ぶ

田村　良平*

こうして学科紀要に追悼文を書くことになろうとは、まことに思いも寄らぬご逝去である。たまたま本年度、学科主任の任に相当たり、故人とは専門を異にするわたくしが筆を執ることとなった。万一、肯綮に中らぬ指摘などあらば尊霊に対して礼を失するであろうけれども、些かの蕪筆はどうかお恕しを願いたい。

思えば青梅校当時、言語文化学科の頃よりのお付き合いである。当学科開設以来長きにわたりご在職だった碩学・小堀桂一郎先生と入れ替わるようにご着任になった三橋先生は、当初から日本歴史学・宗教学の枢要を担う専門家として自負を持たれ、教学上ご自身の責務を認識されて、ひと時も学問を忘れることがなかった。学内業務の繁多を口実に、ともすると研究面での精進を怠る例が見られるのとは裏腹の、王道を往く態度である。事実、学究を疎かにするような不心得の教員に対して故人は厳しい態度で臨まれたのではなかろうか。大学人として当たり前のことではあるが、まことに正しい、筋の通った信念の人であられたのである。

かように時として峻厳な一面を通される反面、三橋先生は実に親切な、まめな方であった。学生たちへの指導のきめ細かさ、付き合いの良さは、まさに群を抜いておられたように思う。日ごろ指導する学科内研究会を率いて毎夏の八ヶ岳合宿学習会のみならず、神社仏閣あるいは博物館への拝観・見学など、豊かな人脈を駆使した上で何よりもご自身少しも骨身を惜しまぬ企画力と実行力は、間違いなく、当学科所属教員の中でも首位に置かれるべき精力的なものであった。

学界における故人の業績については別掲の一覧が何よりもよく物語るであろう。それとは別に学内の逸事について述べるならば、その早すぎる晩年において、三橋先生は日本文化学科の将来を見越したカリキュラム改定、ひいては学科の方向付けにつき、かなり意欲的な改革案を抱かれていたように思う。この数年来、たまたま学科内の検討組織の中で、三橋先生の提案されるプランはしばしば、相当に具体的かつ喫緊の改革性を謳うものであった。ただ机上の学問に汲々としているだけでは、こうしたことにまで思い及ばぬものである。学内業務においても三橋先生が今後果たされたであろう役割を思うにつけ、痛惜の念いやまさる感が深い。

修学の士たる本分を守りつつ、故人は実に趣味の豊かな人であった。ことに愛好されたのはクラッシック音楽ではなかったか。研究室からはしばしば交響曲の演奏が流れて来、その選曲から推し量るに付け焼刃ではない、相当の愛好家たることは歴然であった。いつぞや笑いながらわたくしに話されたことがある。新婚旅行の際、日ごろの綿密さを発揮して旅程を組んだは良いが、ヨーロッパの行く先々で数々のコンサートあるいはオペラの日程を入れ込んだところ、毎々付き合わされるみどり夫人がとうとう音を上げられた、と。なるほど、これは如何にもお人がらというわけで、わたくしも無類に可笑しかったものだ。亡くなられたい

田村良平＊日本文化学科　教授　平安朝文学、古典芸能

ま、未亡人にとっては故人を偲ぶにふさわしい、懐かしい思い出になっておられるのではなかろうかと、そのご胸中を拝察する。

決して軽からざるご病気とて、当初は広言されておられなかったが、ひとたび治療の方針が定まるや学生たちへも堂々と告知され、爾後、どれほど辛苦が伴おうとも、決して弱音を吐かれることはなかった。平成二十六年度に入り、四月の新学期からは明らかに衰弱の度が進まれたが、通院・入院のたびに全快への希望と意志を捨てられなかった。わたくしどももできる限りのサポート態勢は採りつつ、ご休職の措置は考慮せずにご闘病を見守る覚悟でいた。ご出席は無理と承知していながらも、ご逝去の前日、学科会議の開催通知をメールで差し上げたのが最後となった。当然、お返事を頂くことはなかったのが残念である。

ご遺族のご胸中を慮るにつけ今にまったく哀惜の念は失せない。が、学者の一生は後世に遺した業績の質によって決せられる。その意味で、三橋正先生のご生涯はもはや不滅のものと言い得るに相違ない。

尊い時を共にした同僚として、深くそのご冥福をお祈りするばかりである。

三橋正先生略年譜

・逝去時に現職にあったものには＊を付した

一九六〇年（昭和三五）
三月一日　千葉県千葉市に生まれる（後に東京都杉並区へ移り、同地で育つ）
一九七八年（昭和五三）
三月　私立城北高等学校卒業
四月　松本亨英語高等専門学校（現・東京松本英語専門学校）入学
一九八〇年（昭和五五）
三月　同校卒業
四月　大正大学文学部史学科入学
一九八四年（昭和五九）
三月　同学科卒業、文学士
四月　大正大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程入学
一九八五年（昭和六〇）
四月　二十二社研究会運営委員（至一九八七年三月）
國書逸文研究会運営委員（至一九九八年三月）
一九八六年（昭和六一）
三月　大正大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程修了、文学修士
四月　大正大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程入学
六月　神道古典研究所研究員（至一九九五年三月）
一九八九年（平成元）
三月　大正大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程を単位取得満期退学
四月　大正大学綜合佛教研究所研究員（至一九九六年三月）
一九九〇年（平成二）
四月　日本学術振興会特別研究員（至一九九二年三月）
一九九二年（平成四）
四月　国立国文学研究資料館共同研究員（至二〇〇三年四月）
一九九三年（平成五）
四月　放送大学非常勤講師（至一九九四年三月）
埼玉県春日部市老人大学・老人大学院講師（至二〇〇〇年三月）
東京都大田区教育委員会高齢者教室・成人学校講師（至一九九六三月）
一九九四年（平成六）
四月　青山学院女子短期大学現代教養学科（旧国文学科）非常勤講師（至二〇〇九年三月、自二〇一一年四月至二〇一三年三月）
法政大学通信教育部非常勤講師＊
一九九五年（平成七）
四月　江戸川女子短期大学文化史学科非常勤講師（至二〇〇三年三月）
一九九六年（平成八）
四月　大正大学文学部非常勤講師（至二〇〇五年三月）

一九九七年（平成九）
四月　大倉精神文化研究所客員研究員（至一九九七年八月）
五月　日本宗教文化史学会創立発起人、幹事
九月　大倉精神文化研究所研究員（至二〇〇一年三月）
一九九八年年（平成一〇）
四月　清泉女子大学文学部非常勤講師（至二〇〇五年三月）
駒沢短期大学仏教学科非常勤講師（至二〇〇四年三月）
二〇〇〇年（平成一二）
四月　東海大学文学部非常勤講師（至二〇〇四年三月）
二〇〇一年（平成一三）
五月　戒律文化研究会運営委員・編集委員＊
六月　論文「平安時代の信仰と宗教儀礼」により大正大学から博士（文学）の学位を授与される
二〇〇三年（平成一五）
四月　國學院大學文学部非常勤講師（至二〇〇四年三月）
國學院大學神道文化学部非常勤講師＊
二〇〇四年（平成一六）
四月　明星大学日本文化学部言語文化学科助教授（二〇〇七年、准教授に名称変更）
二〇〇六年（平成一八）
五月　比較宗教精神史研究会設立発起人、会長＊
二〇〇八年（平成二〇）
四月　岩手大学人文社会科学部非常勤講師（至二〇〇八年九月、集中講義）
『小右記』講読会　代表＊
二〇一〇年（平成二二）
四月　明星大学特別研究員として、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）に留学（至二〇一一年三月）
二〇一一年（平成二三）
四月　明星大学人文学部日本文化学科教授＊
二〇一四年（平成二六）
一一月七日　逝去（享年五四歳）

三橋正先生著作目録

・講演や学会・シンポジウム等での報告等については、活字化されたもののみを採録した
・事典・辞典や教科書等の分担執筆分は省略した
・二〇〇四年以降の研究活動の詳細な記録が、『明星大学研究紀要（日本文化学部・言語文化学科）』一四以降の各号の研究成果及び活動一覧に掲載されているので、併せて参照されたい

一九八三年（昭和五八）
三月　「藤原実資の信仰態度について」（『大正史学』一三）
一九八五年（昭和六〇）
三月　「摂関期の春日祭―特に祭使と出立儀・還饗について―」（『神道研究』一一八）
「平安貴族社会と穢」（『宗教研究』二六三）

一九八六年（昭和六一）
三月　「平安時代の物忌に関する二、三の考察」（『宗教研究』二六七）
七月　「摂関期の諸祭にみる「勅使」観の変遷について」（『神道史研究』三四―二）
八月　「村上天皇の仏教信仰について」（『史聚』二一）
一一月　「加茂・石清水・平野臨時祭について」（二十二社研究会編『平安時代の神社と祭祀』国書刊行会）
一二月　「村上天皇の本命元神供について」（『国書逸文研究』一八）
一九八七年（昭和六二）
二月　「藤原実資の観音信仰について」（『大正大学大学院研究論集』一一、『国文学年次別論文集　中古　一　昭和六二年』（一九八八年一〇月）に再録）
三月　「摂関期貴族社会の精神世界―藤原実資の仏教信仰にみる「摂関期」の精神史的位置付けへの試論―」（『鴨台史論』一）
「班幣から奉幣へ―祭祀形態の変化にみる天皇観の変化について―」（『宗教研究』二七一）
五月　「臨時祭の意味」（『歴史手帖』一五―五）
六月　「『三代御記』逸文の再検討」（『国書免文研究』一九）
一九八八年（昭和六三）
二月　「平安貴族の造仏とその信仰―藤原実資の「本尊」と「特仏」をめぐって―」（『大正大学大学院研究論文集』一二）
三月　「記紀神話形成期における「柱」祭祀の意義―神の助数詞との関連で―」（『宗教研究』二七五）
一九八九年（平成元）
三月　「平安貴族社会における宿曜道の展開と天皇観への影響」（『鴨台史論』二）
「古墳祭祀から律令祭祀へ」（『宗教研究』二七九）
七月　「『延喜式』穢規定と穢意識」（『延喜式研究』二）
一〇月　「『弘仁・貞観式』逸文について―『延喜式』穢規定成立考―」（『国書逸文研究』二二）
一九九〇年（平成二）
三月　「平安貴族の仏教信仰―特に摂関期における信仰意識と信仰形態の変遷について―」（『日本仏教史学』二四）
「大祓の歴史的変遷」（『宗教研究』二八三）
一二月　「大祓の成立と展開」（『神道古典研究』一二、神道大系編纂会編『神道古典研究　会報合本（下）』（二〇〇七年四月）に再録）
一九九一年（平成三）
一月　「祓と斎戒」（『別冊歴史読本「神社」総覧』新人物往来社）
三月　「幻の律令祭祀」（『宗教研究』二八七）
「律令国家の祭祀について」（『大正大学綜合佛教研究所年報』一三）
一九九二年（平成四）
三月　「古代における神祇と仏教」（『宗教研究』二九一）
「出家作法の成立とその意義」（『大正大学綜合仏教研究所年報』一四）
六月　「神仏習合と神仏隔離をめぐって」（『神道宗教』一四六）
一九九三年（平成五）
三月　「院政期の宗教事情」（『宗教研究』二九五）

一二月　「中世的神職制度の形成―「神社神主」の成立を中心に―」（『神道古典研究』一五、『日本史学年次別論文集』一九九三年版中世分冊（一九九五年一〇月）および神道大系編纂会編『神道古典研究　会報合本（下）』（二〇〇七年四月）に再録）

一九九四年（平成六）

二月　「小右記」（『別冊歴史読本辞典シリーズ「日記」総覧』新人物往来社）

三月　「神祇信仰の中世的展開」（『宗教研究』二九九）

一九九五年（平成七）

三月　「日本における神観念の展開」（『宗教研究』三〇三）

七月　「浄土信仰と神祇信仰の接点―出家作法の成立とその意義―」（日本仏教研究会編『日本の仏教③　神と仏のコスモロジー』法蔵館）

一二月　「中世貴族社会と神道」（『国文学　解釈と観賞』七七五　至文堂）

一九九六年（平成八）

二月　「由の祓について―儀式研究への提言を含めて―」（史聚会編『奈良平安時代史の諸相』高科書店）

三月　「シンクレティズムに関する総合的研究」（『大正大学綜合佛教研究所年報』一八）

「古代から中世への神祇信仰の展開―神社信仰の成立―」（文部省科学研究費総合研究（A）『古代から中世への転換期における仏教の総合的研究―院政期を中心として―』報告書）

五月　「百武彗星に寄せて　歴史の中の彗星と日本人」（『神社新報』二三六六）

九月　「日本宗教史上における院政期の位置」（『宗教研究』三〇九）

一一月　「平安貴族の造仏信仰の展開―小金銅仏のゆくえ―」（『仏教文化学会紀要』四・五合併号）

一九九七年（平成九）

三月　「シンクレティズムに関する総合的研究Ⅱ」（『大正大学綜合佛教研究所年報』一九）

五月　「臨終出家の成立とその意義」（『日本宗教文化史研究』一―一）

一九九八年（平成一〇）

二月　「古代から中世への神祇信仰の展開」（速水侑編『院政期の仏教』吉川弘文館）

五月　「職業と神々―変貌する神への信仰―」（『歴史と旅』増刊号「神と仏の信仰事典」）

一〇月　「藤原道長と仏教」（『駒沢短期大学佛教論集』一四、『日本史学年次別論文集』二〇〇〇年版古代分冊（二〇〇〇年一〇月）に再録）

一二月　「書評　菅原信海著『日本思想と神仏習合』」（『宗教研究』三一八）

一九九九年（平成一一）

一二月　「摂関期における定穢の変遷―『西宮記』「定穢事」から三条朝まで―」（『大倉山論集』四四）

二〇〇〇年（平成一二）

三月　著書『平安時代の信仰と宗教儀礼』（続群書類従完成会）

同書により、第一回神道宗教学会賞（二〇〇〇年一二月）、第九回中村元賞（二〇〇一年三月）を受賞

三月　「講演録　聖徳太子―理想と現実の間―」（『大倉山講演集』八）

二〇〇一年（平成一三）

四月　『『小右記』の話法と「下官」の用法」（『ぐんしょ』五二）

六月　『『麗気記』の構成と言説」（『日本学研究』四）

七月　「天の日嗣は必ず皇緒を立てよ―宇佐八幡宮託宣―」（『月例講話集』二一　大倉精神文化研究所）

一〇月　「『麗気記』世界の生成―その構造を読み解く―」（『日本思想史学』三三）

大正大学綜合佛教研究所神仏習合研究会編『校註解説現代語訳　麗気記Ⅰ』（法蔵館）

一二月　「五島美術館蔵「伝後京極良経書状」について―仁寿殿観音像と御記逸文―」（所功先生還暦記念会編『國書・逸文の研究』所功先生還暦記念会）

二〇〇二年（平成一四）

七月　「ハラエの儀礼―大祓と王権―」（安丸良夫編『岩波講座　天皇と王権を考える5　王権と儀礼』岩波書店）

九月　「日本宗教史研究の課題」（『仏教文化学会紀要』一一）

一二月　「白河天皇による神事と仏事」（中尾堯編『鎌倉仏教の思想と文化』吉川弘文館）

二〇〇三年（平成一五）

一月　「中世前期における神道論の形成―神道文献の構成と言説―」（大隅和雄編『文化史の諸相』吉川弘文館）

三月　「神の助教詞「柱」の用法―記紀神話形成期の神観念と言語意識―」（『宗教研究』三三五）

「シンクレティズムに関する総合的研究Ⅲ」（『大正大学綜合佛教研究所年報』二五）

五月　「平安貴族の信仰世界」（大久保良峻・佐藤弘夫・末木文美士・林淳・松尾剛次編『日本仏教34の鍵』春秋社）

九月　「書評　佐藤弘夫著『偽書の精神史―神仏・異界と交感する中世』」（『日本思想史研究』三五）

一一月　「摂関末・院政期における定穢について」（『駒沢史学』六一）

二〇〇四年（平成一六）

二月　「地獄の世界」（週刊朝日百科・仏教を歩く一九『空也・源信』朝日新聞社）

五月　「平安時代の宗教と思想」（『史學雑誌』一一三―五「回顧と展望」）

二〇〇五年（平成一七）

三月　「密教儀礼から神道論へ」（『東洋の思想と宗教』二二）

「日本における神の数え方―神の助数詞「柱」の用法―」（明星大学日本文化学部編『明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集第八輯　批評と創作』明星大学日本文化学部）

六月　「怨霊と伊勢斎王―六条御息所をめぐって―」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』七　六条御息所』勉誠出版）

「死と穢―夕顔の死をめぐって―」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』八　夕顔』勉誠出版）

九月　「『麗気記』の世界観」（『日本思想史学』三七）

一一月　「座談会　歴史文献としての『源氏物語』」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』三　光源氏Ⅱ』勉誠出版）

一二月　「大仏造立と日本の神観念―神仏習合の多重性を探る―」（G

BS実行委員会編『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第三号　カミとほとけ―宗教文化とその歴史的基盤』東大寺・法蔵館）

二〇〇六年（平成一八）

三月　「古代における伊勢神宮と天皇」（『明星大学研究紀要（日本文化学部・言語文化学科）』一四）

「律令国家の祭祀―その理想と現実―」（明星大学日本文化学部編『明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集第九輯　理想と現実』明星大学日本文化学部）

五月　「明石入道と住吉信仰」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』一二　明石の君』勉誠出版）

「男の出家」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』一一　朱雀院・弘徽殿大后・右大臣』勉誠出版）

「女の出家」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』一五　女三宮』勉誠出版）

九月　「『麗気記』の構想と「神体図」―密教による神の理論化と図像化―」（速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館）

一一月　「仏像の在処―八宮の仏像をめぐって(1)」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』一八　匂宮・八宮』勉誠出版）

「仏像の在処―八宮の仏像をめぐって(2)」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』一九　大君・中の君』勉誠出版）

「宇治十帖における「出家」」（上原作和編『人物で読む『源氏物語』二〇　浮舟』勉誠出版）

二〇〇七年（平成一九）

三月　「律令祭祀の変質と律令外祭祀」（『明星大学研究紀要（日本文化学部・言語文化学科）』一五）

「蔵王権現と黄不動―日本の山岳宗教における神の出現―」（明星大学日本文化学部編『明星大学青梅校舎日本文化学部共同研究論集第一〇輯　言語と芸術』明星大学日本文化学部）

五月　「王朝文学の背景となる神道・仏教史を中心に」（藤本勝義編『王朝文学と仏教・神道・陰陽道』竹林舎）

六月　「書評　Bernhard Scheid and Mark Teeuwen, ed. "*The Culture of Secrecy in Japanese Religion*, London: Routledge, 2006」（『日本仏教綜合研究』五）

九月　「仏教受容と神祇信仰の形成―神仏習合の源流―」（『宗教研究』三五三）

二〇〇八年（平成二〇）

二月　「日本的信仰構造の成立と陰陽道」（鈴木靖民編『古代日本の異文化交流』勉誠出版）

三月　「平安時代の古記録と『小右記』長元四年条」（『明星大学研究紀要（日本文化学部・言語文化学科）』一六）

八月　黒板伸夫監修・三橋正編『小右記註釈　長元四年』上・下　小右記講読会発行、八木書店発売

九月　「北野天神縁起と神仏習合思想」（竹居明男編『北野天神縁起を読む』吉川弘文館）

一二月　「覚超と上東門院仮名願文」（吉原浩人・王勇編『海を渡る天台文化』勉誠出版）

二〇〇九年（平成二一）

三月　「『諸社禁忌』について―古代から中世への転換期における穢

の諸相―」（『明星大学研究紀要（日本文化学部・言語文化学科）』一七）

六月　「書評と紹介　小原仁著『中世貴族社会と仏教』」（『日本歴史』七三三）

二〇一〇年（平成二二）

二月　著書『日本古代神祇制度の形成と展開』（法蔵館）

三月　「『左経記』治安二年（一〇二二）条　書下し文」（『明星大学研究紀要（日本文化学部・言語文化学科）』一八）

八月　「院政期仏教の展開」（末木文美士編『新アジア仏教史一一（日本一）　日本仏教の礎』　佼成出版社）

二〇一一年（平成二三）

三月　「二〇一一年一月　出エジプト記」（『明星大学研究紀要（人文学部・日本文化学科）』一九）

四月　「柱と神道―自然崇拝から国家宗教へ―」（『季刊　悠久』一二四）

二〇一二年（平成二四）

三月　「摂関期の立后関係記事―『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて―」（『明星大学研究紀要（人文学部・日本文化学科）』二〇）

「神祇信仰の展開」（苅部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士・田尻祐一郎編『日本思想史講座一　古代』ぺりかん社）

九月　「平安前期の神祇と仏教（二〇一一年度大会パネルセッション）」（『日本思想史学』四四）

二〇一三年（平成二五）

二月　「奉幣と災害―災害と古代国家の祈り―」（『季刊　悠久』一三〇）

三月　「摂関期の「着座」「着陣」関係記事―『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて（二）」（『明星大学研究紀要（人文学部・日本文化学科）』二一、小右記講読会と共著）

四月　「九条家における基層的神祇信仰」（小原仁編『『玉葉』を読む　九条兼実とその時代』勉誠出版）

九月　編著『「神仏習合」再考』（勉誠出版、ルチア・ドルチェと共編）

「「神仏習合」を再考するために」（右編著所収、ルチア・ドルチェと共著）

「神仏関係の位相」（右編著所収）

二〇一四年（平成二六）

三月　「摂関期の賀茂祭関係記事（その一）―『小右記』を中心とする古記録部類作成へ向けて（三）」（『明星大学研究紀要（人文学部・日本文化学科）』二二、山岸健二と共著）

「中世神道美術と神道論の歴史的位置」（『宗教研究・別冊』八七）

九月　三橋正監修・菊地勇次郎著『浄土信仰の展開』（勉誠出版）

「日本宗教史」の視座」（日本宗教史懇話会編『日本宗教史研究の軌跡と展望』岩田書院）

「古記録文化の形成と展開―平安貴族の日記に見る具注暦記・別記の書き分けと統合―」（『日本研究』五〇）

付記　本略年譜および著作目録の作成は、向後恵里子・柴田雅生が担当した。作成にあたっては、三橋みどり氏および本学科兼任講師の関

口崇史氏の御助力を得た。